保険毎日新聞連載「みちくさ保険物語」007

近代建築史上の保険会社　第一世代の建築家 (2)　河合浩蔵

この原稿が掲載されるのは 5 月のはじめではあるが、執筆している喫茶店の窓越しに、桜が散る様子が見えている。大学もクラブ・サークルの勧誘で花盛り。キャンパスが一年で最も華やかな季節である。入学式があった昼に生協食堂に入ると、祖父母と母親に囲まれた学生がテーブルを囲んでいた。三世代での入学式への出席に、「おめでとうございます」と声をかけたくなった。別のテーブルに、紺のスーツに身を包んだ新入生がいた。化粧っ気がないところから、地方から上京した学生であることがみてとれた。背筋を伸ばして一杯の素うどんをすすっている。お金がないわけではないだろう。むしろ上京したばかりなので、高校生の頃には手にしていないほどの大金を所持しているに違いない。初めての一人暮らしをする学生の緊張感が、生協食堂の素うどんに現れていた。わたしも 18 歳で親元を離れ地方の大学に入学した経験がある。自宅通学をする学生には味わえない「素うどんの味」である。

近代建築を導入した明治初期の建築家達も「素うどんの味」を知っていたに違いない。清水嘉助に見られるように、在来工法でも相当の議事西洋建築を造ることができたが、近代国家として先進諸国に追いつくためには、正統的な西洋建築を導入し、日本が対等な関係で国交を結ぶに値する国であることを示す必要があった。お雇い外国人の時代が過ぎると、辰野金吾など多くの建築家が留学して「本物」を学んだのである。

戦前日本の近代建築史の本流はイギリスであるが、お雇い外国人の時代は、ドイツ建築が主流となりかけた時期があり、またフランスの近代建築やアメリカの影響もあったという(藤森照信『日本の近代建築、上』岩波新書を参照)。今回は「ドイツ派」に焦点を絞って見たい。近代建築は、近代医学と同じく政府の方針により、ドイツからお雇い外国人が招聘された。しかし、近代医学においてドイツ医学が主流となったのに対して、近代建築においては、イギリスが主流となった。具体的には、ドイツからエンデとベッグマンというお雇い外国人が招聘されたがうまくいかず、イギリスの若き建築家コンドルの来日によって近代建築の基礎が導入されたのである。前回紹介した辰野金吾はコンドルの直弟子であった。

藤森は、第一世代の「ドイツ派」の主要な建築家として、松ヶ崎万長、妻木頼黄と河合浩蔵を挙げている。松ヶ崎万長は、明治 4 年に 13 歳で有名な遣欧使節団とともにドイツに渡り、ベルリン工科大学で建築を学んで明治 17 年に帰国して、エンデとベックマンを助けた。エンデとベックマンが帰国すると、官を辞し、またその後、爵位を返上し、台湾に渡って鉄道局に入った。鉄道局で、駅舎や鉄道ホテルなどを建て、大正 10 年に没している。妻木頼黄は、工部学校中退後、アメリカのコーネル大学に学び帰国後、再びドイツに留学し建築を学んだ「ドイツ派」のリーダー格の建築家である。東京府庁（明治 27 年)、東京商工会議所、日本勧業銀行（以上、明治 32 年)、横浜正金銀行（明治 37 年）が主要な作品である。河合浩蔵は、イギリス派から離れて、ドイツに留学し建築を学んだ。その作品に

は、帝国ホテル（明治 24 年）、神戸地方裁判所（明治 36 年）などがある。工部学校での教育がイギリス建築を中心としていたため、ドイツ派が日本の近代建築において一世を風靡することはなかったが、妻木や河合の影響力によって、ドイツの近代建築の要素が日本の近代建築に多様性をもたらした。

ドイツ派による保険会社建築物でもっとも重要なものは、私の知る限り愛国生命の本社であろう。最初に掲載した画像は、同社の「保険案内」に描かれたものである。誇らしげに表紙を飾っている堂々とした本社屋は、大正元年に落成した河合浩蔵設計による建物である。次に掲載した写真から、大きなドームを据えているという共通点はあるものの、前月号で紹介した「辰野式」の建物とは異なるものであることは明らかあろう。建物内部については、1 階の平面図と「会議室」とされた部屋の写真からおおよその見当がつくだろう。

愛国生命の成立と特色のある販売商品について詳しく記述するには、紙面がたりないので、ここでは同社の簡単な経緯だけを示しておく。同社は、菓子税法の廃止に尽力した代議士の鈴木萬次郎に感謝する記念事業として明治 29 年に設立された保険会社である。初期営業において、全国の有力な菓子業者の協力や、鈴木が医師であったことから医業関係者の支援を得て発展し、大正元年には画像に見られるような立派な本店社屋を建設するに至った。

後に同社を合併した『日本生命 100 年史』に同社の本社屋に関する記述がある。これによれば、愛国生命が創業当時に本店として使用していた日本橋区材木町にあった家屋が手狭となったため、明治 37 年に煉瓦造り 2 階建て 57 坪の社屋を新築落成し、本店営業所とした。しかしこの社屋も、社務拡張のためにすぐに狭隘となったので、新たに麹町区有楽町 3 丁目 3 番地に新社屋を新築した。この新社屋が、先に述べた河合浩蔵の設計のものである。明治 45 年 6 月 2 日に起工して、大正元年 12 月 14 日に落成した。明治 45 年 7 月 30 日にあたる日が大正元年 7 月 30 日と改元された日なので、明治から大正にかけて建設されたとはいっても起工から落成まで半年かかっただけである。

新社屋の敷地坪数は 700 坪余、建坪は 342 坪余で、総工費は 28 万 200 余円であった。この総工費は、同社の大正元年の不動産投資額の約 4 割にあたる金額であった。愛国生命は、営業用敷地であっても借地を嫌い、購入する方針を採用していた。地方支部や出張所の新設の際もこの方針を堅持していたことから、大正元年の不動産投資額は比較的大きく、総資産の 13%に達していた。新社屋の総工費は、この不動産投資の 4 割余りの金額であった。（愛国生命「第 15 回営業報告書」明治 45 年を参照。）以上のことを考えると、新社屋の建設は、同社にとって重要な経営的決断であった。

愛国生命は、昭和 20 年 2 月に日本生命に合併された。この社屋は日本生命の東京の重要な拠点の一つとなり、その後改築されて、日本生命東京本部（日比谷ビル）が置かれることになった。合併会社の日本生命にとっても、経営戦略上、重要な資産だったのである。

保険毎日新聞連載「みちくさ保険物語」007

愛国生命「保険案内」

愛

低料保險

愛國生命

利益配當附

新種養老保險案内

東京市日比谷公園前

社長 原邦造

專務取締役 曄道文藝

取締役 堀池末三郎

常任監査役 岡田昌吉

監査役 木村德兵衛

東京支店 本社共通 電話(代表)二九〇五番 振替口座東京二四八八番

大阪支店 大阪市東區高麗橋一丁目 電話本局(五)三六九番 (五)一一六番

名古屋支店 名古屋市西區島田町五丁目 電話本局九五五番

金澤支店 金澤市片町 電話三六二番

京都支部 京都市鯖薬師通堺町角 電話本局(二)一五五番

九州支部 福岡市天神町 電話九八八番

關東支部 本社共通 電話(代表)二九〇五番 銀座(代表)五六三三番

東北支部 仙臺市國分町五丁目 電話七二九番

中國支部 廣島市大手町四丁目 電話(三)四五九番

四國支部 高松市壽町 電話南六四六番

北海道支部 小樽市稻穂町西八丁目 電話一六一七番

横濱支部 横濱市中區尾上町五丁目 電話(本)二八九二番

朝鮮支部 京城府黄金町二丁目 電話二八六〇番

神戸支部 神戸市榮町通四丁目 電話三宮二八四番

前橋支部 前橋市田中町 電話三四二番

秋田支部 秋田市登町 電話九二四番

松本出張所 松本市彌生町 電話一五二六番

鹿兒島出張所 鹿兒島市金生町 電話三四二番

青森出張所 弘前市田代町 電話九一二番

富山出張所 富山市大工町 電話二三八三番

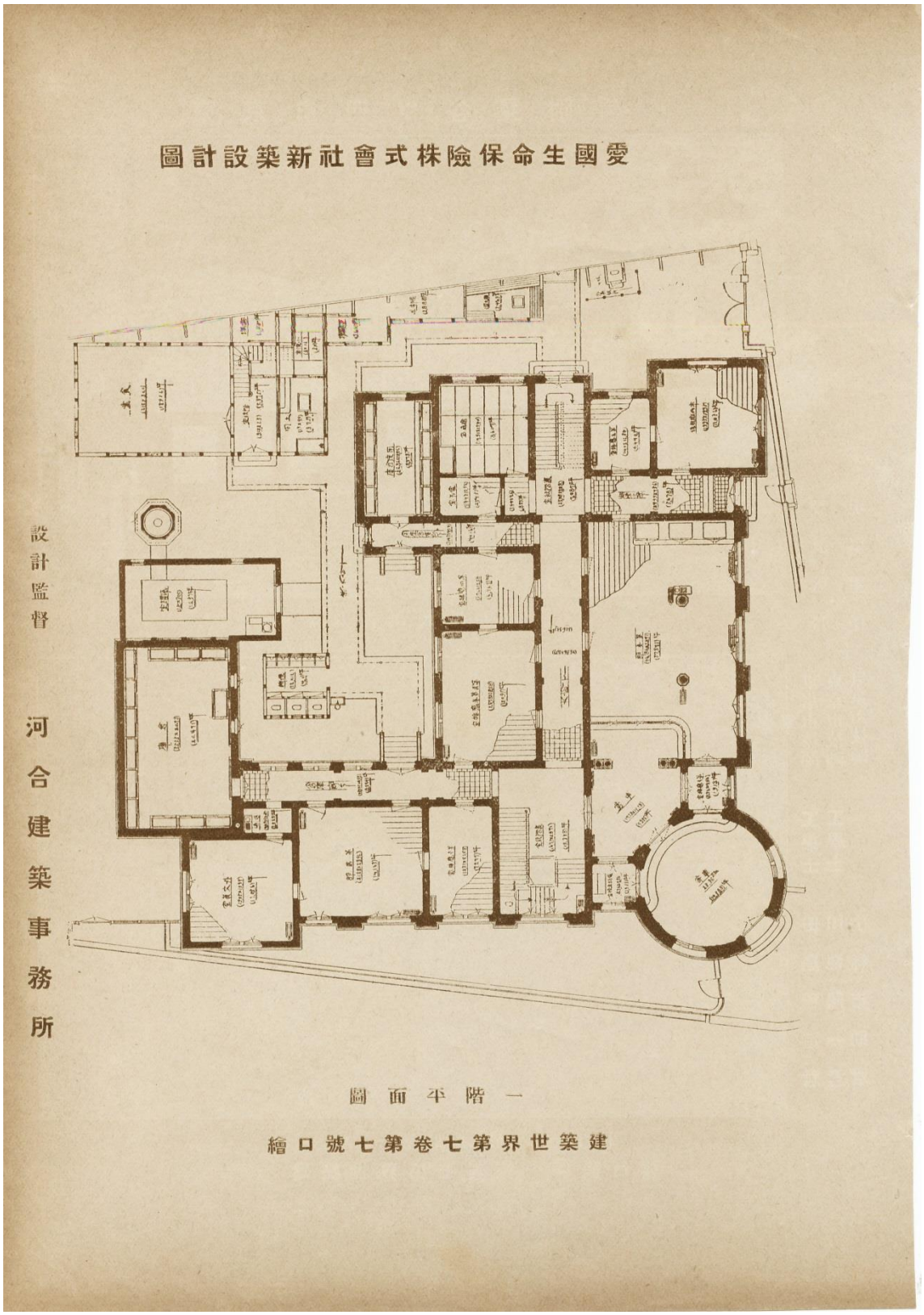
靜岡出張所 靜岡市人宿町 電話一六七番

和歌山出張所 和歌山市九番町 電話二三七六番

岡山出張所 岡山市新西大寺町 電話七〇五番

岸和田出張所 岸和田市岩城町 電話三三三番

愛国生命本社正面



愛国生命本社１階平面図

愛国生命本社会議室